

戦後80年 平和の村宣言から40年

～恒久平和への願いを語り継ぐ～

今年で戦後80年。そして占冠村が「平和の村宣言」を採択してから40年が経ちました。戦争の記憶が風化しつつある中、ヒロシマ・ナガサキの惨劇を忘れず、二度と戦争が起らないよう平和の大切さや命の尊さを広く伝え、後世に語り継いでいくことが大切です。

今年も「占冠村教育を語る住民会議」が中心となり、7月29日から8月1日までの4日間、村内の中学生および後期課程生を戦争被災地である広島県に派遣する「広島平和体験学習事業」が実施されました。



第39回 広島平和体験学習報告

地獄から這い上がった広島
占冠中2年 井川 紡

私たちは4日間広島に行ってきました。まず2日目に、広島平和記念資料館を訪れました。ネットで原子爆弾のことを調べたり、塾の先生から「まじで飯が食べれなくなる」と言われたりしていたので、悲惨なんだろうなあと軽く身構えていましたが、飾ってある写真の一つ一つ見ていったら、言葉を失ってしまいました。全身にやけどを負った人の写真や亡くなった方の遺品はもちろん、水を飲んで亡くなった人や体に変色して亡くなった人などの絵があり、教科書やネットに載っていない現実が広がっていました。その後、被爆体験講話を聴きました。講師の大田さんによると、原子爆弾の熱風や放射能で直接亡くなった人もいれば、月日が経ち体に斑点ができてその後亡くなる人もいたとのことで、それを聞いて私は原子爆弾は無差別に人を殺すとしてつもない兵器なんだなと思いました。

ただきました。その建物の一つ、袋町小学校平和資料館でビデオを見ました。袋町小学校の壁にはチョークなどで書かれた文字があり、現代技術で解読したところ、探している人物の名前や年齢が書かれてたり、我が子を探す母親の思いなどが書かれていたといった内容で、それを見て私は、その時代は連絡手段が少なく戦争の被害を受けていたため、こういう方法しか無かったんだなと思いました。

今回の平和体験学習を通して私が学んだことは、原子爆弾は恐ろしいもので、この世界にあつてはならないものだということです。原子爆弾によって広島は焼け野原となりました。そのため、多くの人も亡くなってしまいました。そんなものがこの世界にあつたら、いつしか戦争で世界がめちゃくちゃになってしまふと思います。しかし、そういう出来事があつたからこそ今私たちがいて、元気に広島に行けたのかなと思います。

最後になりますが、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

広島を訪れて

占冠中2年 藤岡 拓雄

私は今回、広島平和体験学習で広島に行かせていただきました。今回私が実際に広島に行つて学んだことは二つあります。

一つ目は、「戦争はどれだけ危険なものか」ということです。今回私は、実際に被爆した人の講話を聞くことができました。また、広島の中を歩きながら被爆当時のまま残されている建造物などを見て回りました。実際に説明さ

れないと分からないところなどもたくさんあってとても勉強になりました。語り部の方がおっしゃっていたことがありました。それは、「昔にこのような悲惨なことが起こったという事実を知らない人が年々増えている」ということです。そのことを聞いて私は、戦争を繰り返さないようにするには、今の若い世代の人たちにもっと広くこのようなことを語り継がなくてはいけないと思いました。そのため、今回私たちが見て回った原爆ドームなどの

有名な物以外にも、街の片隅にある原爆の痕跡なども紹介する必要があると感じました。

二つ目は、「たくさんの方が次の世代に戦争の話を受け継いでいる」ということです。今年は日本が被爆してから80年の年ですが、今もなお被爆したということが日本中に語り継がれています。8月6日の広島平和記念日に行われた式典には世界各国からたくさんの方が訪れました。このように海外から訪れた人たちがまたその国などで広めていくことで世界各国の人たちに語り継いでいくことができます。私は実際に被爆したり戦争を経験したりしたわけではありませんが、今回広島に行き、原子爆弾や戦争の危険さを改めて実感しました。このような悲惨なことを繰り返さないために、次世代の人や原子爆弾を所持している国などに戦争や原子爆弾はとても危険だから起こしてはいけないということを伝えていきたいと思っています。

最後になりますがこのような貴重な機会をいただきありがとうございます。

広島で学んだこと

トマム学校8年

ラナ マユ

この夏、私は広島で原爆ドームや平和記念資料館、被爆建物などを見学する平和体験学習に参加しました。教科書やネットで知っていたこともありましたが、実際に現地にいき、目で見て、話を聞くことで、想像以上の衝撃を受けました。

まず最初に原爆ドームを見たとき、「本当にここに原爆が落ちたんだ」と強く感じました。写真で見えていた姿がそのまま目の前に現れ、立っているだけで胸が苦しくなり、言葉が出ませんでした。

資料館では、被爆者の手紙や衣服、当時の写真などが展示されていて、「この人たちはあの中で必死に生きようとしていたのではないか」と思いました。ネットで見たことのある資料もありましたが、実物の持つ迫力や悲しみはまったく違ってました。被爆体験者の講話では、当時の状況や気持ちを80年近く経った今もはっきりと覚えていることに驚きました。それ

ほど恐ろしく、つらい体験だったのだと実感し、「戦争は二度と繰り返してはいけない」という思いが強く伝わってきました。

今も残る被爆建物を見たときは、自分がその時代に入り込んだような感覚になりました。戦争は昔のことではなく、今も続いている現実なのだと思います。

この体験を通して、平和は当たり前ではなく、多くの人の苦しみや願いの上にあるということ学びました。私は、この学びを忘れずに、平和の大切さを伝えていける人になりたいと思います。



広島の声を聴く

引率者(教諭)

長瀬 桃果

今回の研修では、被爆体験講話を通して、戦争の現実と平和の大切さを改めて考える機会となった。講師は、原爆投下当時5歳だった大田さんである。「母の陰になった私は助かったが、母は大やけどを負った」という言葉から始まり、当時の過酷な状況が語られた。やけどを負った人が「水をくれ」と叫びながらも、「水を飲むと死んでしまう」と制止されたこと。川に逃げた際、上流から多くの遺体が流れてきたこと。人が焼けるにおいが今も忘れられないこと。生々しい記憶が次々と語られた。

中でも印象に残ったのは、瓦礫の下や川から遺体を掘り出し、身元も分からないまま学校の広場で火葬されたという話だった。そうした作業を行った人たちがいたという。大田さんは「道などを整備するために、遺体を集めて処理した人がいた」と語った。この言葉に私は衝撃を受けた。復旧のためとはいえ、「整備」

と「処理」という言葉が、人の命や死を物のように扱っているように感じられ、強いやりきれなさを覚えた。戦争とは、そうした極限の状況を生むものなのだと思感した。

さらに心に残ったのは、「先生」と助けを求めている子どもたちも多かったという。私は現在、教員として子どもたちと日々向き合っている。もし自分が同じような状況に置かれたら、目の前の子どもを助けるのか、家族を優先するのか、即座に判断できるのだろうか。非常時における責任と葛藤を、自分のこととして考えさせられた。

資料館では、涙を流して展示を見る外国人の姿も見られ、平和への思いは世界共通なのだと感じた。戦後80年という節目の年に広島を訪れ、改めて「伝えること」の大切さを胸に刻んだ。

今回の研修を通して得た学びを、教員として、一人の人間として、次の世代にしっかりと伝えていくことが、私にできる平和への貢献であると感じる。

第37回 反核平和の 火リレー



核

兵器の悲劇・悲惨さを語り継ぐとともに、核兵器廃絶を訴えながら「平和の火」を走りつなぐリレー運動「反核平和の火リレー」。今年で37回目となり、北海道では7月22日から8月10日までの間で実施されました。

占冠村では、8月5日(火)に広島平和体験学習に参加した中学生・後期課程生や村内青年女性ランナーとして参加し、地域の皆さんから声援を受けながら、ゴール地点である占冠村総合センター前まで無事に走り切ることができました。



平和の村宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。

私達は、世界で唯一の被爆国民として被爆の恐ろしさ、被爆の苦しみを全世界の人に訴え、広島、長崎の惨禍をくりかえさせてはならない。

私達は、先の大戦でものいわず多くの御霊(みたま)をむかえた国民として、いかなる武力紛争もくりかえさせてはならない。

私達は、国是たる非核三原則が完全に守られることを願い、占冠村への核兵器の配備、貯蔵、通過を許さない。

私達は、占冠村が核攻撃の目標となるおそれのある施設を設けることを認めないことはもとより、いかなる国の軍事行動、軍事演習も許さない。

右、決意し、ここに「平和の村」を宣言する。

昭和60年3月18日

占冠村

第39回 広島平和体験学習報告会



広島平和体験学習の報告会が8月8日(金)に占冠村コミュニティプラザで開催されました。
ヒロシマの地を訪れた4人の報告者から、それぞれが学んだことや感じたこと、戦争や平和に対する思いなどについて発表があり、報告会に参加した約40人が真剣な面持ちで耳を傾けていました。